はじめに

現代社会において多くの人が抱いている疎外感、それは一体どこに由来するのか？

端的にいえば、それは我々の生きる社会それ自体が疎外されているからではないか。社会が疎外されているから社会の中に生きる我々も疎外されている。生活の基調が疎外されたものであるから、満たされない思いを感じざるを得ない。これが、現代人が疎外を感じる理由ではないか。

しかし当然、反論もあろう。疎外を感じる人々がいるのは否定しないが、社会それ自体は決して疎外されてはいない。何よりも現代は豊かであり、かつてよりずっと暮らしやすくなっていると。

確かにその通りである。現在は昔に比べてずっと豊かであり、間違いなく以前よりも進歩している。その動かぬ証拠が平均余命の大幅な上昇である。衛生環境と栄養状態の向上によって乳幼児死亡率は大きく低下し、がんのようなかつてはなすすべのなかった致命的

な疾患に対する治療技術も日進月歩で向上している。

それでもなお、多くの人が疎外を感じ、自分の人生について何らかのままならなさを感じて生きている。本当はこうじゃない、本当の自分は違うのだという思いは、豊かになって衣食が満たされてもなくならない。

こうした本来ありたい自分と現にある自分との隔たり、本当はしっかりと自らの手に摑(つか)んで離れてはならない大切なものがしかし、自らの手から離れてよそよそしくなってしまうような事態。こうした事態が、本書の主題たる疎外である。

本書ではこうした疎外について、カール・マルクス（一八一八―一八八三）の理論を中心に解説しようとする。

なぜ疎外を語るのにマルクスを中心にするのかといえば、マルクスこそが疎外を克服されるべき悪として位置付け、疎外の本質を、人間が自ら作り出したモノによって自らの意図に反して支配されるような事態として明確化したからである。

ここでいうモノは物体に限らない。制度やシステムといった最大限広い意味でのモノになる。その代表は貨幣である。貨幣は生活をいっそう便利にするために発明されたはずのものである。事実、貨幣がなければ経済の発展はあり得なかった。しかしその貨幣が貧富

の格差を拡大してしまった。

単なる交換の手段であるはずのものが、それ自体の蓄積が目的になるという転倒が生じている。貨幣というモノによって人間は疎外されている。しかし貨幣を生み出し使い続けているのは他ならぬ人間である。まさに貨幣において人間は、自らの意図に反して、本来は単なる手段でしかないものを目的にするという形で疎外されている。こうした疎外をこそ、マルクスは主題とした。

このことはまた、マルクスにあっては疎外とは個人的な問題である以前に社会のあり方の問題であることを意味する。我々の生きる豊かな現代社会はしかし、今なお資本主義であり続けている。資本主義での人間関係の基本は、労働者と資本家の対立のような分断にある。このような、連帯ではなく分断を人間関係の基調とする社会に生き続けることが、豊かな現代社会にあって今なお多くの人が疎外を感じざるを得ない根本的な理由ではないか。疎外がその本質であるような社会に生きていれば、そこに生きる者は疎外を感じずにはいられない。

マルクスが疎外を社会のあり方だと見たのは、個人を軽視したからではない。人間はその本質において社会的存在であるからこそ、個々人の自己実現の前提として社会全体が人

間化されることを望んだからに他ならない。

そして疎外を何よりも社会的な問題として位置付けることによって、人類の歴史に対する大きな見取り図を描くことができる。人間の歴史とは疎外の歴史ではないかということである。

個々の人生がままならないのは、各人がその一員である人類史それ自体の基調が疎外にあるからではないか。だとすると、社会のあり方が疎外されたものではなく、疎外されていない、もしくは疎外を積極的に克服する過程にあるようなものに変化すれば、そうありたい理想の自分と現実の自分との疎隔に苦しむという現状も大きく変わるのではないか。

もちろん、人間は多様なので、社会全体の基本性格が根本的に改善されても、なお苦しみに打ちひしがれることがあるのは避けられない。しかしその強度と頻度は、疎外を基調とした現行社会よりも大幅に低減されるのではないか。だとしたら、疎外の事実を正しく認識し、その克服を展望するということには少なくない意義があるはずだ。

本書はこうした問題意識に基づき、読者が疎外の問題について考える縁（よすが）となることを目指したものである。

本書はマルクスを中心にマルクス前後の疎外論を解説し、最後に「疎外なき社会としての共産主義」＝ゲノッセンシャフトを展望するという形で構成されている。ゲノッセンシャフトとは連帯を基調とした人間関係のあり方である。だからこそ、資本主義に生きる我々が被らざるを得ない疎外を、連帯社会である共産主義において克服できる展望が開かれる。

第一章では疎外と強く結び付く貧困の問題を端緒に、現代社会における疎外の問題状況を整理する。

疎外を哲学の中心概念の一つとした功労者はゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル（一七七〇―一八三一）であり、マルクスの疎外論はヘーゲル疎外論の批判的継承によって成ったものである。

第二章ではそうした疎外論を本格的にスタートさせたヘーゲル以前の代表的な疎外論のあり方として、ホッブズ（一五八八―一六七九）やルソー（一七一二―一七七八）らの社会契約論を解説する。社会契約論が実は疎外論だったという事実は一般には知られていない。この事実を知ることで社会契約論への新たな視角が開かれるのではないか。

第三章ではマルクス疎外論の直接的起源としてのヘーゲル及びヘーゲル左派の疎外論を

解説する。

第四章は本書の中心テーマであるマルクス疎外論を概観する。ヘーゲルでは同一視されていた対象化活動一般と疎外を明確に区別することによってマルクス独自の疎外論が形成された。そしてマルクス以前では現在の一般的な用法とは異なり、むしろ積極的で肯定的な契機として語られていた疎外が、否定すべき悪として明確化された。まさにマルクスによって、今日的な意味での疎外論が形成されたのである。

第五章では疎外と共に語られることの多い物象化について、この概念が広まる嚆矢となったルカーチ（一八八五―一九七一）の『歴史と階級意識』の批判的検討を通して解説する。

第六章では実存主義的な疎外論理解の代表例として、ハイデガー（一八八九―一九七六）の「『ヒューマニズム』について」でのマルクス及び疎外についての言及に対して検討する。

第七章ではマルクス以降で疎外論を発展的に展開した代表例としてエーリッヒ・フロム（一九〇〇―一九八〇）を取り上げる。

そして最終章となる第八章で、本書の中心テーマであるマルクスの疎外論が求める、疎外なき社会としての共産主義＝ゲノッセンシャフトとは何なのかを概説し、環境問題のよ

うな現代的な諸問題への疎外論的思考の適用可能性について示唆する。

本書は入門目的の新書として、予備知識がない読者が一読して理解できるような平易な叙述を心掛けた。とはいえ、いかんせん本書の主要内容が哲学の古典的な学説の解説である限り、テーマそれ自体の難解さは避けられないところがある。できる限り直接的な引用は行わず、曖昧さを残さないように砕いて解説するようにする一方、必要最小限ではあるが、どうしても提示する必要のある文章は少し長めでも引用するようにした。必要な引用を行わないことで、かえって正確な理解が妨げられる可能性があるためである。

本書の各章はそれぞれ独立しているのでどの章から読み始めても構わないが、各章は他の章と有機的に結び付いているので、通して読むことで全体の主旨が分かるようになっている。著者としては普通に第一章から読んでいただくことを求めたいが、忙しい読者はマルクス疎外論を概説した第四章とその理論的可能性を展望した最終章を読めば、本書の一番強調したいメッセージが分かるはずである。

本書が人間の社会と歴史において、ことさらに重要な問題である疎外について考えるきっかけになれば幸いである。

なお、古典からの引用に際しては、既存の翻訳を用いる場合はその旨を明記した。翻訳者や翻訳書名が記されていない引用は原典から直接訳出したものである。

目次

はじめに 3

第一章　疎外とは何か
——資本主義と貧困 18

疎外という言葉
疎外からの回復
豊かさの中の疎外
疎外としての貧困
不公正な分配による貧困
民意とイデオロギー
隠された奴隷制
意図せざる疎外

第二章　ヘーゲル以前の疎外論
——社会契約論を中心に　42
疎外論前史
英語とドイツ語での疎外
神話と社会契約の類似
ホッブズの契約論
譲渡による疎外
ロックの労働論
ルソーの契約論
第三章　ヘーゲルとヘーゲル左派の疎外論
——自己意識と神の正体　77
直接的起源としてのヘーゲル疎外論
精神の外化

人間社会の基本原理としての疎外
世界の説明原理としての疎外
ヘーゲル哲学の宗教的性格
自己意識の疎外――バウアーの疎外論
人間本質の疎外としての神――フォイエルバッハの疎外論
宗教的疎外をどう位置付けるか

第四章　マルクスの疎外論
――否定すべき現実としての疎外

肯定的疎外から否定的疎外へ
理想と現実の疎隔
疎外される原子
市民社会それ自体の変革
疎外としての貨幣

特殊性の否定による普遍的解放
対象化一般と疎外の区別
疎外の四規定
疎外の原因としての分業
『資本論』での疎外論
疎外こそが資本の本質

第五章　ルカーチの「物象化」論

――マルクスとの対比

疎外の下位概念としての物象化
物象化の原義
『歴史と階級意識』での不正確な物象化談義
マルクス自身の物象化＝物件化論
ルカーチの自己批判

第六章　ハイデガーの疎外論理解
——疎外と実存　190
実存主義と疎外概念
ヒューマニズムとその代表者としてのマルクス
ハイデガーの疎外論理解——ヘーゲルとマルクスの混同
第七章　フロムによる疎外論の展開
——「持つこと」から「あること」へ　203
マルクス以降の代表的疎外論
マルクスとフロイトの統合
フロム的マルクス解釈の功罪
「ある」の思想的系譜
「ある」社会としての社会主義
「ある」論の真意

第八章　疎外論の理論的可能性
——疎外されない人間と社会への展望　229
疎外なき社会への展望
資本主義の現況
大前提としての唯物論
疎外なき社会への移行
新たな人間関係原理としてのゲノッセンシャフト
国家原理の否定による家族原理の復権
環境問題の本質としての疎外された生産力
疎外としての人類史
おわりに　270

註 274
参考文献 280